



## 今、賛美すること

～どのような言葉で、誰と共に～

賛美歌検討専門委員 中田義直（市川大野）

宗教改革は礼拝改革であったといわれます。当時の礼拝は民衆の理解出来ないラテン語によって執り行われていました。聖書も聖歌隊の賛美歌もラテン語です。民衆は意味を理解することなく、ありがたい雰囲気の中で時を過ごし、主の体なるパンをいただいて礼拝を後にしました。礼拝での信徒と聖職者との間には、与える者と受ける者という決定的な立場の違いがあり、理解している者と理解することを許されずに従う者という違いがありました。

宗教改革の三大原則は“信仰のみ、聖書のみ、万人祭司”です。この三大原則を実現するためには、意味を理解して礼拝に参加する会衆の存在が重要です。ですから、自国語の聖書、自国語の賛美歌、そして、会衆賛美をルターは推進したのです。“理解している者”と“理解することを許されない者”という隔てを取り除く礼拝改革、それが宗教改革です。

宗教改革の主張をより徹底させたいと願うバプテストにとって、意味を考え、理解しつつ礼拝に参加することが重要です。また、礼拝での賛美歌は、与える者と受ける者という隔てを取り、共に歌う会衆の賛美であることも大切なのです。

賛美歌検討専門委員会議では毎回数曲の賛美歌を取り上げて“評価する”という作業をしています。この作業では“詩”の意味を理解することに多くの時間を費やしています。そして意味を理解した上で評価します。その際、重要なのが“この賛美歌を、今、そしてこれから、私たちは礼拝で共に賛美できるだろうか”という視点です。

ところで、バプテスト誌でも報告しましたが、昨年3月に聖公会の新しい『聖歌集』の編纂に携わった宮崎光氏の講演会を行いました。宮崎氏によれば、今回の『聖歌集』改訂で、ヒロシマ、長崎、沖縄の歴史を踏まえた平和を願う賛美歌が加えられ、その一方で9.11以降の世界を見つめ、聖戦を思わせる賛美歌が削除されたということでした。その講演を通して、私は“今”という時に対する理解が、賛美歌の評価に大切であることを学びました。

3.11を経験した私たちは、“今”という時をどのように理解したらよいのでしょうか。そして、私たちは誰と共に賛美することを願うのでしょうか。出口の見えない原発事故、放射能に対する不安の中で、私たちはどのような言葉で神様を賛美しているのでしょうか。賛美の言葉が、被災地の人々との隔ての壁となっていないのでしょうか。

今という時代の中で、歴史と向かい合いつつ、隔ての壁を取り除く賛美の歌を“共に”主に献げていきたいと願っています。

# 新生讃美歌と私

～新生讃美歌54年のあゆみから～

## 最終回 賛美歌集編集の苦労と今後の課題

松見 俊

新生讃美歌（2003）編集委員（第1次～第3次）  
（1994年8月～2003年3月）

私は18歳の時、1965年東京郊外の仙川初井教会でバプテスマを受けました。初めて教会を訪問した日以来、水曜日の祈祷会、土曜日の夕拝、そして日曜日の礼拝と週3回教会の集会に出席しました。夕拝は基本的に伝道的な集会で、そこで用いられていたのが『新生讃美歌I』と『新生讃美歌II』の小冊子の賛美歌集でした。祈祷会においても時折、『新生讃美歌』が用いられており、私は福音的な賛美歌に親しむことができました。主日礼拝では日本基督教団の『讃美歌』が用いられていましたが、選曲されるのは「雑」というジャンルで括られた492番以降の福音的賛美歌が多いようでした。

### 1. 1989年版編集委員会

宣教100年記念行事として主日礼拝で用いることのできる賛美歌集を作ろうということになり、私も委員に選ばれたのですが、他の委員の多彩な顔ぶれを見て、これはバプテストとしてまとまって仕事ができないかも知れないと思い、委員会参加を辞退しました。また、神学を学んだ者として特に歌詞の神学的吟味を依頼され、最初のゲラ刷を頂いたのですが、旧態然とした賛美歌が多くて（生意気言ってご免なさい）、恐れをなしたことも辞退するきっかけでした。

### 2. 2003年版編集委員会

収録賛美歌数が少ないので、礼拝で用

いられるために500曲以上を収録する賛美歌集を作ろうということで、再び編集委員に選ばれました。いろいろ問題はあったとしても、バプテストを愛し、日本バプテスト連盟に加盟する教会の一員であることに喜びを感じている者として、委員会に参加して少しでも良い賛美歌集を作ることに協力しようと考え方を変えたのでした。編集委員会における課題はいくつかありました。

#### 2-1 バプテストらしい賛美歌とは？

最初の課題は、バプテストらしい賛美歌とは何かという問いでした。私自身日本バプテスト連盟そのものが独自の賛美歌集を持つことに消極的であるため（日本基督教団の賛美歌集を使っても別に不便を感じなかったので）、もし、バプテスト独自の賛美歌集を編集・出版したら、何をして「バプテスト的」といべきかという問いです。しかし、バプテストの礼拝の伝統そのものがかなり多様で、バプテスト的礼拝とは何かということが語りにくいように、バプテスト的な賛美歌とは何かというコンセンサスを得ることも困難な課題です。委員会の最初に数回議論はしましたが、結局、委員の意見はマチマチで議論を深めることはできなかったように思います。いろいろ多様な賛美歌が豊富に収録されているという点では、今回の『新生讃美歌』は自

由で、バプテスト的であるのかも知れません。

## 2-2 賛美歌選曲の基準

委員会に出席していて、まず驚いたことは、信徒たちが作詞作曲して提供してくれた賛美歌の内容が、余りに個人的信仰経験を歌う歌が多いということでした。「私が寂しく、孤独な時に、イエス様が慰めてくれた」という内容が圧倒的で、曲も西欧的な従来の翻訳物と変わらないのです。まあ、考えてみれば、それがバプテスト教会に集う信徒たちの信仰の実態なのでしょう。礼拝に出席して嬉しかったとか、神を賛美して心が躍ったというような「教会的」な内容が乏しいということは、私たちの信仰、教会形成の実態の反映なのでしょう。新しく採用すべき賛美歌選定の基準とは何かを考えさせられました。結局、それぞれの委員が投票するという民主的？な方法が採用されました。

## 2-3 賛美歌の翻訳

そのような現実の中で、大谷レニー先生は、礼拝の中間部で歌われるような神賛美と教会論的な賛美歌、キリスト者と教会の社会的使命を歌った賛美歌を選んで私に翻訳を依頼してくれました。このジャンルの賛美歌が少ないという批判を持っていた私ですので、喜んで努力してみました。バプテストのバプテスマ理解を反映した賛美歌なども翻訳しましたが、どれだけ実際に用いられているのでしょうか？ 相変わらず福音的賛美歌が皆さん好きなのでしょう（私も嫌いではないのですが）。賛美歌の翻訳は、本来、英語、ドイツ語、ラテン語などの外国語の知識、そして、日本語のセンス、それにももちろん、音楽の素養の三拍子が揃わないとできない仕事です。その三つ

とも不十分な人間として無謀なことをしてしまいました。外国語を日本語に翻訳する困難は、すべての音に母音がつく日本語に翻訳すると、たとえば、「イエス・キリスト」は6文字（音符）あるいは7文字必要となり、原詩の豊かな情報を十分に伝えることができないことです。そこで、文語と口語の混じった奇妙な日本語となったり、文法的に誤りではないにせよ、不備なものであったり、なんとなく歌う人の感性に甘えて理解されることを期待するようなもの、神に対して敬語を用いていない部分が出てしまうことなどの苦労がありました。基本的には花鳥風月、安易な日本人向けの神学概念などを避け、極力原詩に忠実に翻訳しました。まあ、自分でも気に入ったものもありますが、歌っていて恥ずかしくなるものも多少あります。私は編集委員というより、翻訳を中心に実務の方に参加しすぎたのかも知れません。

## 3. 今後の課題

今後の課題、あるいは賛美歌を巡るヴィジョンについてですが、神学教育を受けた牧師たちがしっかりした歌詞を書くような運動をしたらどうかという提案があります。ルターの宗教改革には彼の賛美歌が貢献したことは良く知られていますし、ボンヘッフアーの賛美歌も素晴らしいものです。とは言え、牧師自身、個人の魂を追い求める開拓伝道者ではあっても、「教会観」が欠如している場合もあるのでしょうか…。いや、説教は考えるけれど、礼拝全体のデザインや教会音楽に関心を持たない牧師も多いのでしょうか。

また、日本の文化・精神を反映した賛美歌とはどのようなものか？を考えることも必要でしょう。

(西南学院大学神学部教授 (実践神学))

## 579番 立てよ つわもの

有明教会 田中文人

私は、13歳の時に信仰告白をしバプテスマを受けました。その頃から、この讃美歌は歌っており（『讃美歌』（日本基督教団）380番「立てよいざ立て」）、私の「愛唱歌」になりました。リズムが調子よく、歌っているうちに元気が出て来ることが、その理由です(339番も同じメロディー)。ですが、それ以上に素晴らしいことは、クリスチャン人生そのものが歌詞に表されている点です。

私も十字架の血で罪赦され、主のために立てられました。しかし、主に立てられた「つわもの」といっても、日々内外からの「仇」との戦いの連続、悔い改めの毎日です。その様な者にも神様は、「さかえの主より冠を受け」られることを約束しておられます。感謝のうちに、「み座のもとに永久に仕え」る日を望み見ながら、生かされるかぎり、「み手によりつつ」「召しに應えて務めに励」みたいと願っています。

## 244番 救い主にぞわれは仕えん

多摩ニュー教会 山本 千晶

私は今年、信仰生活11年目を迎えました。教会から祈られ遣わされる場所に、賛美を捧げる機会が与えられてきました。出かける先にはいろいろな出来事が待っています。時として、自分の弱さを痛感し、うなだれる私があります。そんな私を絶えず励まし、くじけそうな思いを引き上げて下さるイエスさまの存在。それを体感させてくれるのが讃美歌です。讃美歌はずっと、私の魂を励まし、慰め、最終的に喜びで満たしてくれました。

中でも「救い主にぞわれは仕えん」は、満たされた魂を奮い立たせてくれる讃美歌です。イエスさまの御元に招き入れられた勝利の凱旋の感覚が与えられてくるのです。今、この時代に共に生きて働いて励まし支えて下さるイエスさまに出会える讃美歌だと感じています。

## 379番 行きて告げよあまねく

洋光台教会 舛田 栄一

毎週日曜日の朝、会堂のいつもの席にすわり、今日は何んな讃美歌があるだろうか？と、少しばかりわくわくしながら週報を開きます。軽快なベースライン、音取りもOK、周囲の方々と織りなすハーモニーは、至福です。

『新生讃美歌』を手にした当初は、既知の曲であっても異なる編曲に驚きと困惑を隠せませんでした。最近思うことは、『新生讃美歌』が実に多くの方々の祈りと奉仕の内に世に生み出されたこと、バプテスらしい明るく力強い賛美歌がたくさん編纂されているということです。

豊かな響きを求めるだけではなく、大切な会衆賛美を支えてくださる奏楽者への感謝、共に礼拝を守る兄弟への真摯な関心を持つことこそが、主が私に求めている本当の賛美であると思う昨今です。

## 544番 ああ嬉しわが身も

藤沢教会 尾崎 奏美

自分がクリスチャンであるという看板が、生きることの重荷ではないかと思う時期がありました。イエス様による解放の喜びを実感しておらず、律法的な価値観に縛られていました。ある時メッセージで、キリストに結ばれて生きることが、どれだけ自由と希望に満ちた生き方であるかを教えられ、正に目から涙が落ちたように、それからは疑いや恐れがある時にも主にある喜びを歌わずにはいられない、そんな歩みへと変えられていきました。この讃美歌は、主のものとして生きる喜びが溢れていて、大好きな讃美歌です。三拍子系のメロディーでリズムが主を賛美しながらも、主の道を強く雄々しく歩む確かな足どりが聞こえてきそうです。この賛美のように、いかなる時も「救われし身の幸」を味わっていきたいと思います。